

〈教育報告〉

外国語カリキュラムの新機軸について： 英独仏から世界の言語と文化へ

河須崎英之*、高濱愛**、崎村耕二***

A New Direction in the Teaching Program of Foreign Languages:
From English, German, and French to the World's Languages and
Cultures

KAWASUZAKI Hideyuki *

TAKAHAMA Ai **

SAKIMURA Koji ***

Department of Foreign Languages,
Musashi-Sakai Campus, Nippon Medical School

0. はじめに

本稿では、日本医科大学基礎科学の外国語カリキュラムにおいて平成28(2016)年度より展開されることとなった「世界の言語と文化」の開設の目的と内容、および実現に至る経緯を報告する。また後段で、授業担当者2名により、教育内容の展開および授業運営の実務、さらに実施結果の概要について論説する。なお、ここで取り上げる「世界の言語と文化」の教務上の区分と名称は、科目名が「外国語」、ユニット名が「外国語演習(世界の言語と文化)」、となっている。

*日本医科大学武蔵境校舎外国語教室非常勤講師

**同、非常勤講師

***同、教授

(4)

0.1 日本医科大学外国語カリキュラムの歴史的背景

ある特定の大学・学部の現在の外国語カリキュラムを論じるにあたり歴史的観点を導入するかどうかの問題は、その大学の特徴や目標、また、論者の視点によって一定の選択が許されるであろうが、前身の済生学舎開学より約140年、大学設置以来100年近い歴史を持つ日本医科大学（以下、「本学」と略す）の場合は、特別な意義をもって取り扱われるべきだと思われる。

歴史的に外国語の取り扱いがどのような事情でどのように推移してきたかについて本論の趣旨から逸脱しない範囲で、下記の通り簡単に経緯を要約しておく。（戦前の資料における漢字の旧字体は新字体に置き換える。）

【済生学舎】

すでにドイツ医学へ舵を切っていた明治初期の医学界では、医学の専門知識を得ようとするばドイツ語の原書の読解は必須であった¹。済生学舎でも、ドイツ語の原書または訳書（または口述）により教授されていたので²、ドイツ語学習の重要性は認識されていたはずである。しかし済生学舎では、学科目一覧に医学の専門科目のみがあり、ドイツ語自体は正規の教育科目として取り扱われてはいない³。実際、明治30年に在学していた野口英世は、英語、ドイツ語、フランス語を独自に夜学等で学んでいる⁴。いずれにしても済生学舎は「学業の速成」をめざしており、全国から集まってきた学生の目的は医術開業試験合格であったからドイツ語の習得そのものは目下の大きな関心事ではなかったという事情もあるだろう。なお、済生学舎は明治19年より「薬学部」を置いていたが、学科目の中に「独逸学」なるものが見られる⁵。これがドイツ語科目なのかどうかについては不明である。

【私立日本医学校から日本医学専門学校まで】

済生学舎が廃校になったのち、紆余曲折のうちに開校した私立日本医学校では、明治37年（1904年）の段階で「独逸語学」という名称の授業が行われていたことがわかっている⁶。ただし当時の学則第4条では「随意科」とあり、必須科目ではなかったことがわかる。英語は学科目に見当たらず、また講師陣にドイツ

語の担当者があるのみである。大正元年に認可された日本医学専門学校（新学期開始は9月11日、『日本医学』94号）では、大学令により日本医科大学（旧制）となる大正15年までやはり専ら「独逸語」が開設されていた⁷。

【旧制日本医科大学（学部と予科）】

大正15年、日本医科大学が設立認可を受けた際の学科目には外国語は見当たらず、随意科目にさえ入っていない⁸。旧制大学の医学部でドイツ語等の外国語が正式な科目として教授されていないのは奇異に見えるが、4年制を採っていた当時の旧制医学部においては、英独の二か国語は、予科の課程等で習得済という前提があり、本科（医学部）では医学の専門科目に集中するという方針であっただろうとも推察できる。

「学部」（修学年限4年以上）と併設された「予科」（修学年限2年、のちに3年）は、新制医科大学となった現在の6年制医学部の「基礎科学」（旧来の進学課程）に相当すると考えられる。この教育課程では「独語」および「英語」が開設されていた。ただし注目すべきは、ドイツ語・英語の表記の順番にも優先度が暗示されていることとあわせて、両者の時間配分である。週当たりの時間数を比較すると、第1、第2年次のそれぞれで「独語」9、「英語」3となっており、ドイツ語重視を見て取ることができる⁸。昭和5年段階では比率が「独語」11、「英語」3となった⁹。

のちに述べるように、予科では昭和9年より、独語、英語と並んで3年次にわずか週2時間であるが「羅甸語」^{ラテン}が開講された¹⁰。この認可申請書の印字された科目表の「独語」と「英語」の隙間に、手書きで「羅甸語」^{ラテン}が挿入されており、同時に時間数が「独語」9→11、9→11、9→11、「英語」（3→2、3→2、3→2）と訂正されている。つまり、歴然とドイツ語に最大の比重を置く時間配分があわただしく行われているのである。これを昭和10年に提出された学科課程授業時間数改訂の認可申請書の中にある「時勢ノ進運二伴ヒ必要學科目ヲ加入シ」という文面と考え合わせると¹¹、昭和8年の国際連盟脱退から昭和11年の日独防共協定へとつながる国家の不穏な対外関係が医学部の外国語教育にも影を落としているのではないか、という推量成り立つ。旧制医科大学の「外国語」は戦争の混乱期を何とか切り抜け、やがて戦後の新制大学設置にたどり着く。

【新制日本医科大学の設置（進学課程設置以後）】

医学部に併設されていた予科は戦時を経て昭和 26 年に廃止されたが、この時期の外国語科目の詳細は明らかにできなかった。昭和 21 年度には単に「外国語科」とのみあり、第 1 学年 264 時間、第 2 学年 264 時間であった。ただし、備考に「第二学年ニ在リテハ適宜^{ラテン}羅匈語ヲ課ス」とある¹²。昭和 30 年に進学課程が設置されたことにより、大学医学部の正規の教育課程に英語・ドイツ語が開設された。ただここでも 1 年次「独逸語」6 単位、「英語」4 単位、2 年次「独逸語」4 単位、「英語」4 単位、となっており、若干独逸語の単位数が多い¹³。昭和 42 年には両者ともに 6 単位ずつ合計 24 単位となった¹⁴。その後、非常勤講師（当時の名称は兼任講師）の担当によりフランス語が 3 年次の選択科目として開設されていた時期があったが平成 2 年度より 1・2 年次に安定的に選択必須科目として配置された。なお、『日本医科大学 70 年記念誌』によると昭和 38 年段階で英語およびドイツ語の専任・兼任教員に加えてラテン語の兼任が存在したことが確認できるがカリキュラムの詳細は不明である¹⁵。

平成 11 年に行われたカリキュラム改訂は、今回の新機軸導入直前までの本学の外国語教育を特徴づけるものであった。その一つの特徴は、必須科目の英語（1・2 年次）を中心に据え、初修外国語としてのドイツ語とフランス語を選択必須科目に配置するというものである。具体的な科目名は、ドイツ語講読／フランス語講読（1 年次）、ドイツ語文法／フランス語文法（1 年次）であった。この改訂により、ドイツ語の明治時代以来の長期にわたる優位が、その後の英・独の拮抗関係を経て、ついに崩れ去り、英語が主要科目としての地位を獲得するとともに、ドイツ語・フランス語がいわゆる選択科目としての初修外国語に区分されたのである。ただし、この改訂の特徴がもう一つある。「外国語演習」が 1 科目開設されて「ギリシア語、ラテン語、スペイン語、中国語など」とあるように¹⁶、小規模の枠内であるが外国語の選択肢を広める試みが行われたことである。ギリシア語はドイツ語担当教員が担当したことがわかっている¹⁷。その後「外国語演習」の授業内容は英語、ドイツ語、フランス語の中から選択、という形になり平成 27 年度まで続くことになった。

【戦前におけるラテン語の開設】

平成年間の一時期、ラテン語が一つの選択肢として提供されていたという事実は上記の通りであるが、はるかにさかのぼって戦前の一時期にも教えられていた時期があった。最も早い時期のものとして確認できるのは昭和3年医学部学則で「ラテン羅匈語」が「随意科目」として記載されている（一年次のみ週1時間の開講）。科目表に示された唯一の外国語であるラテン語の授業は、しばらくの間（少なくとも昭和8年まで）続いた¹⁸。一方、当時3年制となっていた予科においても昭和9年より、3年次にわずか週2時間であるが独語、英語と並んで「ラテン羅匈語」が開講された¹⁹。

この時期に週2時間程度の時間数でもラテン語教育が必要となった、という理由は不明である。ラテン語の「随意科目」としての取り扱いを説明する教務上の資料は手元に無い。ラテン語が医学用語の大きな源流を成すこと、とりわけ解剖学の学術用語はラテン語である、という根本的な理由があるのならば、当初から必須科目として、ドイツ語と並んであるいはそれ以上に重視してもよいはずであるが、解剖学等、専門教育の内容にラテン語の語彙や語形成の知識が組み込まれているのであえて別途語学として教える必要はない、という理由が最も妥当な根拠だと思われる。ただ、外国語に配分される時間数の不規則さに関しては、前述の通り、この時期に英語の時間数が相対的に減少しており、ドイツ語増加との大きなアンバランスを少なくとも見かけ上は解消する試みとしてラテン語が浮上したとも考えられる。ヨーロッパでの不穏な国際状況の中で、各国との政治的関係が各言語の取り扱いの変化に作用するという事は容易に理解できる。英・米・仏との対立が独・伊との接近へ向かい、最終的には日独伊三国同盟（1940年）に至る過程で生まれた小さな副産物がラテン語だったと見ることもできる。

なお、『学校法人日本医科大学百三十周年記念誌』によると、昭和10年～13年の期間に「ラテン語科」なるものが存在したことが記載されているが²⁰、「学則変更認可」によれば昭和16年段階で科目表にまだ「ラテン羅匈語」の記載がある²¹。昭和21年段階の学則で、適宜「ラテン羅匈語」を課す、とあったのは前述のとおりである²²。

(8)

0.2 外国語科目の推移のまとめ

本学の外国語教育においては、前身の日本医学専門学校から大学設立（大正15年）の後、終戦までかなりの期間、ドイツ語が主な言語であった。このドイツ優位は開講時間の増加という形を取って昭和5年から顕著になった。新制日本医科大学の設置（昭和27年）以降、一定期間、ほぼ同等の重みがドイツ語と英語に与えられていた。必須の2言語に加えて、フランス語とラテン語が選択科目で小規模に開講されていた時期が平成10年まで続いた。平成11年のカリキュラム改訂により英語が主な言語となり、ドイツ語はフランス語とともに初修の選択科目となった。この科目構成は平成27年度まで続いたが、あわせて「外国語演習」という科目がギリシア語、ラテン語、スペイン語、中国語という選択肢を提供した。

0.3 旧外国語カリキュラムの構成

平成25年(2013年)段階の外国語カリキュラムの配当科目を『学生便覧2013』（日本医科大学）に基づき簡略化して表記すると次のようになる²³。

<第1学年>

英語（A） 必須 年間60時限 2単位

英語（B） 必須 年間60時限 2単位

ドイツ語講読・ドイツ語文法* 選択必須 年間60時限 2単位

フランス語講読・フランス語文法* 選択必須 年間60時限 2単位

外国語演習** 必須 年間24時限 0.8単位

*ドイツ語講読・ドイツ語文法またはフランス語講読・フランス語文法の組み合わせより選択する。

**英語・ドイツ語・フランス語より選択する。

<第2学年>

英語 必須 年間 24 時限 0.8 単位

これが、0.1 で示した平成 11 年度以降の「英語が主言語、独・仏は初修選択科目」という取り扱いの実相である。

この構成は次の年から本学において「国際認証基準対応カリキュラム」が開始されることに伴ってさらに改訂された。この国際認証カリキュラムは、本学の 6 年制医学教育全体にわたって大きな変革をもたらした。その大きな狙いは、「臨床医学」において臨床実習の時間数を 70 週に増やし、その内容も見学型から参加型へと充実させることであった。旧カリキュラムでは、各科目に「単位」と「時限」の数が割り振られた配当表が、『学生便覧』に記載されていたが新カリキュラムでは「単位」の記載は無くなり、「時限」のみの記載となった。また新カリキュラムの開始とともに全講義時間は各時限、90 分から 70 分へと短縮された。外国語の正式な科目名として、第 1 学年においては「外国語」、第 2 学年においては「基礎科学」が当てられ、各授業は「ユニット」という名称により、英語 I A、等の区分が用いられることとなった。新カリキュラムにおける外国語の科目構成は次のとおりである。

<第1学年>

英語 I A 必須 30 時限

英語 I B 必須 24 時限

英語 I C 必須 30 時限

英語 I D 必須 30 時限

外国語演習(ドイツ語)* 選択必須 30 時限

外国語演習(フランス語)* 選択必須 30 時限

<第2学年>

英語 II 必須 24 時限

*ドイツ語またはフランス語よりいずれかを選択。

(10)

旧から新への推移は、ユニットの数でみると英語が増えたように見えるが、実際のところ、全体として時間数は若干減っており、また、ドイツ語とフランス語の選択必須は名前を変えて残ったものの、時間数は半減した。

0.4 新機軸 —— ドイツ語・フランス語の廃止と「世界の言語と文化」の開設

さて、筆者（崎村）が基礎科学外国語教室の「科目責任者」として着任したのは上記の旧・新カリキュラムの移行期であった。すでに新カリキュラムは始動していたが、その新カリキュラムの中の一部の授業内容を見直すこととした。具体的には、第1学年の外国語科目からドイツ語・フランス語の授業をなくし、それに代わる新規授業案を作成することとした。

通常、教育課程において単位認定にかかわる科目を新設するためには、文部科学省への申請が必要となり、学部・学科の改組や新設の場合には担当者の審査も行われることがある。しかし、前記のとおり本件において科目名は「外国語」のままであり、合計時限数に変更はなく、授業の内容と展開の形式であるユニットを変更するのみであることから、科目責任者の立場で教務部委員会に変更案を提出し、異議なく承認されたので平成28年から開始されることとなった。変更されたのは第一年次のユニット「外国語演習」の構成と必須の取り扱いである。

<旧>

外国語演習（ドイツ語）*	選択必須	30 時限
外国語演習（フランス語）*	選択必須	30 時限

<新>

外国語演習（世界の言語と文化）**	必須	30 時限
-------------------	----	-------

この改訂をもって、少なくとも私立日本医学専門学校以来、「独逸語学」あるいは「独語」「ドイツ語」という科目のもとに112年間にわたって行われてきた

* ドイツ語またはフランス語よりいずれかを選択。

***2名の各担当者が「世界の言語」「世界の文化」のいずれかを担当。

ドイツ語教育が本学から無くなった。

独・仏の言語の廃止という大きな決断に関しては、具体的な検討のプロセスをここに詳述することは控える。特に、明治時代以降、主にドイツ語が医学の言語として日本の医学部で教えられてきた経緯とその意味は何だったのか、そして21世紀の現代においてふさわしい選択は何か、等々については、他の論考に譲ることとする。ただ、いくつか指摘できることは次の通りである。

確かに明治初期の段階ではドイツ医学は世界のトップクラスではあったが、当時、イギリス医学も同様にトップクラスであり、ドイツ語だけでなく英語も日本における医学の言語となる可能性を十分に持っていた。結果的にはドイツ語に軍配が上がったが、その最終的決断の背景にあったのは、十分な学問的審議の結果というよりは政治的勢力の作用であったのである²⁴。

学生へのアンケート調査、および本学卒業生を含めた関係者への聞き取りを行った限りでは、英語への関心が主流であり、他方、特に医学部において独・仏の言語に時間を割いて学習する意味が見出しがたいことがわかった。ドイツ人の医師から、「日本の医学部で、ドイツ語を半ば強制的に学ばせる意味が理解できない」という率直な回答もあった。『英語の未来』で著者グラッドルが示唆しているように、科学の分野における出版物の言語が、17世紀以降、英語からドイツ語に移行し、ドイツ語の地位が第1次世界大戦まで続くものの、その後アメリカの役割が強まった結果、英語は「国際語としての地位を確保した」²⁵。ドイツ人が医学の分野の使用言語をドイツ語ではなく英語だと考えている割合が72%である、という調査結果にも説得力があった²⁶。

現代において医学部を卒業し晴れて医師の資格を得た者が国際的な状況、すなわち異なる文化的・言語的背景を持つ人と職業的な意味で交流する場面では、英語が最も有力な使用言語となることは明らかである。したがって英語教育を欠かすことはできない。ただし、言語の運用能力だけでなく、世界の多様な言語およびその背景にある文化の一般的な知識を持っておくべきである。そして知識だけでなく、異文化交流の技能をある程度身につけておくべきである。場合によっては言語よりも助けになる非言語的な人間的側面の開発も必要になってくるであろう。そのような要請に応じる基礎的な教育を行うカリキュラムが欲しい、という意図のもとに「世界の言語と文化」という名称で教育内容を組み立てることとした。

今回の新機軸の導入にあたっては、「外国語演習」の見直しと併せて、英語科目にも内容の変更を施した。すなわち、講義形式によって行われる「英語I B」にお

いて、医学英語の語源・語形成を授業内容とすることとした。それは、ドイツ語であれ英語であれ、医学用語の大部分は、ラテン語・ギリシア語由来であり、古代ギリシア以来の西洋医学の大きな発展を広い視野で眺めた場合、ゲルマン系言語の一つに過ぎないドイツ語を取り上げて学習の対象とするよりも、英語の運用能力を高める教育と併せて「医学英語」の成り立ちをラテン語・古代ギリシア語の視点から教授することがはるかに合理的でもありまた現実的でもある、と考えたためである。

0.5 新授業内容「世界の言語と文化」開設案

新設ユニット名を「外国語演習（世界の言語と文化）」とし、「世界の言語」および「世界の文化」という2つの内容を軸として授業内容を構成する計画を立てた。新設案は教務部委員会において異論なく承認された。担当者については、学内の専任教員に適任者がいなかったため、JREC-IN Portalにより非常勤講師の全国公募を行い、適任者が得られたので、平成28年（2016年）度より、カリキュラム上に「世界の言語と文化」という新規の教育内容が加わり、滞りなく実施されることとなった。その概要は次の通りである。

A. 世界の言語

世界の言語を概説する。言語の多様性を理解することを目標とする。世界には英語以外にどのような言語があるかについて教養的な知識を得ることで、英語偏重の語学的興味を脱し、多言語・異文化・多文化に対して開かれた心を養う。

主な留意点：

- (1) あくまで教養的・導入的な内容とする。
- (2) 取り扱う言語を次の二つの言語群に分ける。
(言語群 1) 文法・構文の基本的骨格を概説する。
(言語群 2) 上記の言語群 1 に関連するものとして単に言及するのみ。
- (3) 特定の言語の習得は目指さないが、習得に関心を持つ学生のための導線を張る。(参考書等の紹介など。)

教育方法：

(1) フランス語・ドイツ語を含めたヨーロッパ諸語の文法体系の骨格を説明する。この場合、他の語族との比較により、その特徴を浮かび上がらせる形で講義する。

または

(2) ヨーロッパ諸語以外の語族を中心として取り扱い、英語や日本語との比較により、その特徴を浮かび上がらせる。

(3) 上記(1)と(2)の両方を含めて世界の言語の多様性を概説する。

⇒形態論的な解説を中心とする。

⇒発音など音韻論的な側面に関しては最小限とし、分析的な説明は行わず、言語の感覚的な側面を印象付けるような解説に重点を置く。

⇒語彙論的な解説は最小限とする。(「英語 I B」で取り扱うため。)

⇒ある言語(または文化)に特徴的なコミュニケーションの形態を取り扱うことはできる。(「世界の文化」との調整が必要。)

⇒屈折語、孤立語(中国語等)、膠着語(日本語等)の間の比較の観点は必須となる。興味に応じて他の種類の解説もありうる。

授業計画：

(1) 1クラス約30名。

(2) シラバス上の標準授業内容は、年間15回分。ただし、少人数のクラス分けをするため同一内容を裏表2クラスに対して教授する。1学年約130名の学生を少人数のクラスに分け、週2コマという限られた時間割の枠内で授業内容を教授するため。

3) 「世界の言語」担当者と「世界の文化」担当者との間で内容を振り分ける。学生から見た場合、「世界の言語」の標準回数15回、「世界の文化」の標準回数15回、となる。

試験等：

- (1) 試験は、主に言語の多様な側面を鳥瞰的に見ることができたかどうかを測る。
- (2) 語彙・文法の暗記等による言語の習得は、目標としない。したがって、試験においてはこの内容は極力避ける。

B: 世界の文化：

英語を第1言語あるいは第2、第3言語として話す人々は、英国、アメリカ合衆国等、アングロサクソン系の国民とは限らない。本学の学生が将来、国際的な場面で英語を用い交流する人々は、スイスやイタリア、中国、インド、ブラジル、等々、さまざまな人々であろう。したがって、日本において英語を学習する学生が、英語すなわちアメリカ人（あるいはイギリス人）の言葉、という前提で英語という言語を把握するとしたら、それはきわめて一辺倒な言語観だというばかりでなく、偏った世界観を形成することになる。この授業では、国際的な場面において様々な文化的背景をもつ人々と交流するにあたって、異文化的背景に関する知識不足からくる誤解や摩擦から少しでも自由になり、好ましい国際的人間関係を築くことができるよう、異文化理解の基礎を学び、実践的な交流スキルを習得することを目指す。

主な留意点：

- (1) あくまで教養的・導入的な内容とする。
- (2) ある特定の文化を中心に講義を進めることは可能であるが、一つの文化だけを取り扱うことはしない。かならず文化の多様性という観点を保ち、複数の文化の参照あるいは言及を行う。
- (3) ヨーロッパの文化を取り扱う場合は、例えばドイツ、フランス、イタリア、スペイン等の間で相互比較を行うなど複合的観点を保つ。また、異なる文化圏（アジア、アフリカ等）との比較の観点を持つ。

教育方法：

- (1) 次の話題をできるだけ多く複合的に取り扱う。
慣習・生活（食生活、年中行事、日常的慣習等）
歴史・民族（あくまで上記の背景として）
文化的遺産（音楽、美術、文学、演劇等）*
- (2) 講義で取り上げた文化のいずれかに関心を掻き立てられた学生のため、参考書等の紹介などを行う。
- (3) 言語は取り扱わない。ただしある文化（または文化群）に特徴的なコミュニケーションの形態を取り扱うことはできる。（「世界の言語」との調整が必要。）
- (4) ビデオ、音楽（音声）、実物（衣装など）を提示して学生の興味を引くことも一案。

授業計画：

- (1) 1クラス約30名。
- (2) シラバス上の標準授業内容は、年間15回分。ただし、少人数のクラス分けをするため同一内容を裏表2クラスに対して教授する。1学年約130名の学生を少人数のクラスに分け、週2コマという限られた時間割の枠内で授業内容を教授するため。
- (3) 「世界の言語」担当者と「世界の文化」担当者との間で内容を振り分ける。学生から見た場合、「世界の言語」の標準回数15回、「世界の文化」の標準回数15回、となる。

試験等：

試験や課題（レポート）は、文化の多様性理解と異文化リテラシーの習得に関するものを主眼とするが、学生の関心に基づき特定の文化を選択して解答する形式でもよい。また、概観的な知識や理解を問うものであってもよい。

*現代に視点を置き、歴史・民族の内容を織り交ぜる。

1. 大学における第二外国語教育について

大学における第二外国語教育の意義については、教育現場でも種々に論じられている。その一例が『大学時報』(2017.5)²⁷における座談会「大学における第二外国語教育の意義とこれからの展開」であろう。そこでも述べられているが、かつての第二外国語は「3、4年次の専門教育につなげることが前提」であった。確かに第1筆者(河須崎)自身も3、4年生時にドイツ語あるいはフランス語の原文で書かれた言語学の論文を講読する授業を履修した記憶がある。しかし、今やほとんどの学術論文は英語で書かれ、「英語の論文を読ませるだけで手一杯」という現状があるようだ。その中で、第二外国語を必修科目ではなく選択科目にしたり、ダブルディグリープログラムと結びつけたりと、いろいろな方策が模索されている様子が窺える。

一方、学生の側が第二外国語の授業にどんなことを求めているかという報告もいくつかある。大橋、高嶋(2018)²⁸では、学生の期待する授業を、次のようにまとめている。

「実用性があり、スモールステップで文法や発音、単語等の基礎が学べ、学習者間においてコミュニケーションをする機会の多い、楽しい授業」(p.104)

「当該の外国語における困難な項目を把握したり、英語と第二外国語間の類似点や相違点にも留意した指導」(p.104)

このような現状の中、前章で述べられている通り、日本医科大学では2016年度から第二外国語に代わり外国語演習の1つとして「世界の言語と文化」が必修科目とされている²⁹。「世界の言語」を本稿の第1筆者(河須崎)が担当し、「世界の文化」は第2筆者(高濱)が担当するという形式である。本稿では、「世界の言語と文化」の担当者が、それぞれどのような考えに基づいてどのような授業を行っているか、またそれに対する学生の反応はどうかということについて述べていきたい。

2. 「世界の言語と文化」の講義目標と授業構成について

2019年度シラバスに記載されている一般目標・行動目標、および講義内容は表1の通りである。

表1 各講義の一般目標・行動目標および講義内容

	世界の言語	世界の文化
一般目標	<p>1) 世界の言語の多様性について理解する。自分の興味を持った言語を学んでいくための手がかりを得る。</p> <p>2) 世界の言語との対照を通じて、英語・日本語の持つ特徴への理解を深める。</p>	<p>グローバル化が進む現在、日常生活において私たちが文化的背景の異なる人々と接する機会が増加する傾向にある。したがって、こうした人々とよりよい人間関係を築いていくことは、社会に貢献しながら人生を豊かに生きるために求められる重要なスキルであるといえる。この講義では、外国人など、文化的背景の異なる人々と円滑にコミュニケーションをとっていくために必要な、文化に関する基本的な理論を、様々なアクティビティ、ケーススタディ（事例研究）やディスカッションを通じて学ぶ。また、海外留学の魅力と方法についても紹介する。</p>
行動目標	<p>1) 基本的な言語学の概念を理解する。</p> <p>2) 格変化を持つ言語（主に印欧語族）の具体例を学ぶ。</p> <p>3) 日本語とよく似た構造を持つ韓国語の簡単な仕組みを理解する。</p>	<p>1) 文化とコミュニケーションに関して、異文化コミュニケーションの分野における基本的な概念・理論・用語などを知る。</p> <p>2) 実際のコミュニケーション場面において、(1)で学んだ概念や理論をどのように生かしていくかを体験的に学ぶ。</p>

	<p>4) 中国語のような構造を持つ言語を知る。</p> <p>5) 英語・日本語の特徴を他の言語と対照して把握する。</p>	<p>3) 海外留学についてその魅力と方法を知る。</p>
講義内容	<p>1) 言語学の歴史 ソシュール『一般言語学講義』の内容、比較言語学と対照言語学の違い</p>	<p>1) オリエンテーション 授業概要紹介</p>
	<p>2) 音声学 1 主に母音の発音について（母音の音色が変わる仕組み）</p>	<p>2) 文化とは何か 文化の定義等を学ぶ</p>
	<p>3) 音声学 2 主に子音の発音について（調音点と調音法）</p>	<p>3) ハイコンテキスト文化とローコンテキスト文化 文化の理解に必要な基礎的概念を理解する</p>
	<p>4) 世界の言語の概観 世界における主な語族の分布、音声学の補足</p>	<p>4) 文化と言語コミュニケーション 文化が言語コミュニケーションにどのような影響を与えるか知る</p>

	<p>5) 世界の言語の分類 形態論について、形態論から見た言語の分類（屈折語、膠着語、孤立語）</p>	<p>5) 文化と非言語コミュニケーション 文化が非言語コミュニケーションにどのような影響を与えるか知る</p>
	<p>6) 動詞の項と格 日本語の例を通して動詞がとる項の数と格表示について</p>	<p>6) 異文化シミュレーション(1) ここまでの復習をシミュレーション（「南バルーンバ文化を探れ」）によって行う</p>
	<p>7) 屈折語・ラテン語について ラテン語における名詞の曲用と動詞の活用について</p>	<p>7) カルチャーショック(1) カルチャーショックとは何かを異文化適応のモデルとともに学ぶ</p>
	<p>8) 屈折語・ドイツ語について ドイツ語の格表示と動詞の活用、過去分詞の使い方など</p>	<p>8) カルチャーショック(2) カルチャーショックの対処法について学ぶ（トランプを使ったバーンガを体験する）</p>
	<p>9) 屈折語・フランス語について フランス語の動詞の活用と人称代名詞の格変化など</p>	<p>9) 異文化シミュレーション(2) 言語コミュニケーションについてシミュレーション（「言葉でコピー」）によって学ぶ</p>

<p>10) 膠着語・韓国語について ハンゲルの仕組み、韓国語の基本的な文法について</p>	<p>10) 海外留学の魅力 日本から海外の大学等に留学する方法や、留学の魅力について情報を得る</p>
<p>11) 孤立語・中国語について 中国語の基本的な文法について、ピジン言語とクレオール言語</p>	<p>11) 価値観 文化と価値観について学ぶ</p>
<p>12) 合同セッション 授業の振り返りと今後に向けて</p>	<p>12) 合同セッション D.I.E. メソッドについて学ぶ</p>
<p>13) 言語類型論 1 言語間で語順を比較する際の指標について、名詞句階層</p>	<p>13) 異文化トレーニング(1) ケーススタディにより異文化コミュニケーションについて実践的に学ぶ</p>
<p>14) 言語類型論 2 二項述語階層に見る言語類型論、各言語における存在文</p>	<p>14) 異文化トレーニング(2) ケーススタディにより異文化コミュニケーションについて実践的に学ぶ</p>
<p>15) 言語と文化 言語相対性仮説について、言語による概念の区切りの恣意性</p>	<p>15) まとめ 授業の総括（「ワールドカフェ」の形式でこれまでの学びを振り返る）</p>

注 1) 講義内容については、後の参照用に実際のシラバスよりも詳しく記載した。

注 2) 第 12 回目の「合同セッション」は、講義時間を 35 分ずつに分け、前半と後半で 2 名の講師が入れ替わることで、1 コマの中で「世界の言語」と「世界の文化」を同時に学べるような形式で実施されている。

以下に、2016年度から2019年度までの4年間にわたる取り組みのうち、実践例として最も新しい2019年度の講義概要等を示した上で、学生の反応について注目すべきものに焦点を当て、世界の言語、世界の文化の順に紹介していく。なお、講義の性質の違いから、それぞれの講義の章立てが必ずしも並行的ではないことをご了承いただきたい。

3. 「世界の言語」

3.1. 授業の狙い

第二外国語が必修でない大学でも第二外国語を選択する学生があるように、英語以外の言語を学びたいという気持ちを持っている学生は多くあると思われる。上述のように日本医科大学では第二外国語の授業は開講されていないが、現今、語学の独習教材は書籍であれ、ネット上のコンテンツであれ、入手しやすいものが多く存在する。学生がある言語を独学したいと思ったときの手助けとなる知識や考え方を教授したいというのがこの授業の狙いの一つである（上述の一般目標1）を参照）。

知識の一つは、音声学である。言語の基本は音声である以上、音声学の習得はどの言語の学習にも必要と考える。また、調音音声学では人間の発声器官の構造を、音響音声学では音の物理的な側面を扱うのだから、理系の学生にとっては最も関心を持っていい分野であると思われる。なお、音声学は英語の発音が苦手な学生にとって、それを克服する手助けにもなり得ると考えている。

他に言語学の知識として、動詞の項と格という概念を理解してもらえよう努めている。ドイツ語のような格変化を持つ屈折語はもちろん、朝鮮語のような格助詞を用いる膠着語でも、格という概念を知っていることでその習得が早くなると思われる。学生が学んでいる英語には、主格、目的格といった用語はあるが、代名詞以外は格による形の変化がないため、格の概念を理解しづらい（理解しなくても習得できてしまう）。日本語には格助詞があるが、日本語を言語学的に学ぶ機会は（学生に授業内で尋ねた限りでは）なかったようなので、やはり格を意識していない。格を意識しないまま、“buy a book”なら「本を買う」、 “follow a person”なら「人に従う」と無意識に訳し分けている。日本語を話す際や英

語を学ぶ際には意識することの少ない格の概念だが、他の言語（特に名詞の格変化が豊富な言語）を学ぶ際には有益となるはずである。

このような個別言語における音韻論、形態論の考え方を習得した上で、いくつかの言語を取り上げてその特徴を概説する。当然ながら、時間的制約があるため、スモールステップで積み上げていくことは望めない。発音上の特徴を説明し、名詞の格の表し方や動詞の活用について実例をあげて概説するしかない。できる限り、学生の既知の言語である英語や日本語との違い、共通点に気づいてもらえるように進めている。本来なら、能格型の言語や抱合を持つ言語など、幅広く扱うべきではあるが、ドイツ語、フランス語、韓国語、中国語と、(ラテン語を除けば)ある程度メジャーな言語を題材としている。

次にさまざまな言語間の対照研究について学ぶ。そこでは、ある言語のある現象を説明するために提唱された規則、分類、傾向などによって、別の言語の別の現象を説明することができることを示し、言語の持つ普遍性といったものに触れてもらうことを狙いとしている。

いずれにせよ、この授業を通して身につけてもらいたいのは、言語にもそれなりの規則があり、観察によってその規則を発見できるということである。日本語を題材として実際に学生に投げかける問題の具体例を次節にて述べる。

3.2. 授業で扱う内容の具体例

例1. 日本語の音素 /N/ (「ン」) の異音について

「カンパイ」「カンタイ」「カンカイ」の「ン」は音声学的にどのように現れるか。

またその理由は。

例2. 日本語の子音語幹動詞の音便について

「食べる→食べて」に対して、「書く→書いて」のような変化を起こす動詞がある。

その変化の仕方は何によって決まるか。

例1については、音声学の知識が必要ではあるが、「ン」が違う音で現れると

したらその理由は「ン」の後の音にあるとしか考えられない（他の条件は同じなのだから）。言語においても、条件を一つだけ変えてやることで要因を特定するという、科学的手法を用いることができることを学んでもらうのが狙いである。

例2については、とにかく思いつく限りの動詞をあげて変化の仕方でグループ分けし、グループ内での共通点を見つければよい。これも極めて科学的な作業となる。言語についても、そのような科学的作業を通じて規則を見出すことができることを学生に実感してもらうのが狙いである。同時に、言語の場合は例外が存在する。そこに自然言語の面白さがあることも感じてもらえれば、授業の目的は果たせるといってよい。

例3. フランス語と英語、日本語の格体系の違いについて

フランス語の授受動詞を使った文では、直接目的語は裸の名詞、間接目的語は前置詞àによって表される。また、3人称代名詞の直接目的語と間接目的語は別の形で現れる。

英語とフランス語では、どちらが日本語の格表示体系に近いといえるか。

例3のポイントは、格体系の比較である。日本語は、授受動詞ではヲ格と二格が英語の直接目的語と間接目的語に対応して用いられる。一方、英語の直接目的語と間接目的語には形の上での区別がない。フランス語においては、上述の通りである。比較をすれば、直接目的語と間接目的語を違う形で表す点で、フランス語の方が日本語の格表示体系に近いといえる。

そもそも、直接目的語、間接目的語という言葉は、動詞に対する名詞の働きを表すものであり、格は（日本語のヲ格、二格という名前が示す通り）形を表すものである。動詞に対してどのような働きを持つ名詞を、どのような形で表すのか、言語を学ぶ際にそういった意識を持つことの重要性を理解してもらいたいと考えている。

ちなみに、2019年度の初めに学生に行った簡単なアンケートでは、「以下の文法用語を説明できますか」という設問に対し、ほとんどの学生が「間接目的語」を知らない、と回答していた。近年のいわゆる英文法離れの影響かと思ったのだが、「これまでの英語の授業で文法を細かく教わった」という項目にイエスと回答した学生は68.9%にのぼる（アンケート回答者数:122名）。このアンケートは、

学生の英語学習の状況を大雑把にでもつかみたいと思って実施したものだが、興味深い結果も見られるので、調査内容を再考した上で継続して行いたいと考えている。

3.3. 期待される授業の効果

3.3.1. 英語学習への効果

英語を学んだ時に、その音声学的特徴をきちんと教わったという学生は少ない。もちろん、人間には聞いた音を真似する能力があり、理屈が分からなくてもその音を発音することは可能であるが、外国語として学ぶ言語については、発音の理屈を知った方が習得が早いと思われる。特に日本語と似ているようで違う音については、その違いを理解した方が発音や聞き取りに際して有効であろう。例えば、日本語の「ウ」は円唇性が弱いが、英語の /u/ は円唇母音であることを教えると、英語の発音の特徴を納得する学生が多い。

また、ラテン語やドイツ語のような格変化を持つ言語を扱った後は、多くの学生が「英語は簡単でよかった」という感想を述べる。英語が得意でない学生、特に英語の文法に苦手意識を持っている学生にとっては、英語に対するハードルを下げる効果があると思われる。ただし、「英語は文法が簡単＝文法を考えなくても感覚で理解できる」という発想から文法を軽視するようになるのはこちらの本意とは言えない。あくまでも言語全般にはある程度の規則があり、その規則がたまたま英語の場合は（ラテン語などと比べ）単純であるということを知ってもらいたい。

3.3.2. その他の言語学習への効果

授業の感想には、「ドイツ語よりフランス語の方が自分に合っていると思った」「韓国語を勉強してみたい」など、英語以外の言語に関心を寄せる内容が多く書かれている。「自分の興味を持った言語を学んでいくための手がかりを得る」という一般目標はおおむね果たされていると考えられる。詳しくは、別

に節を立てて学生からの声を紹介することにする。

3.4. 考えられる問題点

当然ながら、1つの言語についての詳細を1コマの授業ですべて扱うことは無理である。そのため、どの言語についても中途半端な知識や理解しか得られないのではないかという懸念は当然ながらある。しかし、この授業の狙いは特定の言語についての技能を獲得することではなく、それぞれの言語の特徴を把握する力をつけることにある。例えば、「ドイツ語は冠詞によって名詞の格を表し、定動詞が2番目の要素という語順をとる言語である」と学生が把握できれば（実感を伴ってこのことを理解してもらうのも実際にはかなり難しいが）、それでよいと考えている。

もう一つ、学生にとって未知の内容をメインとして扱うため、どうしても講義中心になり、学生が受け身になってしまうのでは、という懸念がある³⁰。この点については、上述のとおり、日本語を題材にルールを発見するタスクを与えたりすることで、ある程度の解決を考えている。個別言語の授業に入ると確かに説明が中心にはなるが、例文を一緒に声に出して読むことをすると、案外と「(授業中に発音練習をするのが)新鮮だった」という感想が出てくる。第2外国語の授業なら当然、発音練習が多くなるのだろうが、英語の授業では高校生くらいになると皆で声を出すことはあまりしなくなるのかもしれない。

個別言語においても、その言語の特徴を学生自らが発見できるようなタスクを行うことが理想ではあるが、やはりある程度の知識がないと、いきなりは難しい。基本的には、期末試験においてそのような思考型の問題を出すようにしている。例えば、ドイツ語の大量の例文と日本語訳、簡単な語注を与え、その資料からドイツ語の定冠詞+形容詞の活用表を作成する問題や、日本の駅のハンゲル表記をいくつか示し、そこから別の駅名のハンゲル表記を推理する問題などである。授業で説明されたドイツ語の格の構造やハンゲルの仕組みを理解している学生は苦もなく解けるし、理解が不十分だった学生も、問題を通して少しでも言語の仕組みについて目が開かれることを期待しての出題である。

(26)

3.5. 学生の声

まとめとして、試験の自由記述欄に学生が書いてきた意見をいくつか紹介する。

「あまり深く授業中でやらなかったが、広く浅く、また有機的に他の言語と結びつけて興味関心を持ちながら勉強することができた」

「それぞれまったく違うと思っていた言語に思いのほか共通点があったことには驚いた」

「世界の様々な言語を、根本にある考え方から統一的に学ぶというスタンスはおもしろいなと思った」

「今まで英語の文法しか学んでこなかったが、語順でしか要素を把握できない言語や、名詞や形容詞にも格変化が存在する言語があると知ることができた」

「言語は丸暗記するものだと思っていましたが、先生の授業を聞いて、法則性さえつかめば、いくつかの言語には対応できることを知った」

これらの声からは、一定の成果が出ていることが窺われる。

4. 「世界の文化」

4.1. 講義の概要

続いて、「世界の文化」の講義概要について紹介する。「世界の文化」も、「世界の言語」と同じく2016年度より開講され、同一教員（非常勤講師・高濱）が継続して担当してきた。開講にあたって考慮したことは、「外国語演習」として提供されること、「世界の言語」と対で進めていく形式であること、の2点である。そのため、文化と関係の深いコミュニケーションに焦点を当て、英語や日本語等の言語を用いたり学んだりする際や医師としての将来のキャリアに生かすことができるように講義内容を選択した。また、コミュニケーションを扱う講義であることから、ペアワークやグループディスカッション、シミュ

レーションゲームなどのアクティブラーニングを積極的に取り入れる形式で設計した。具体的には、表1に示した通り、学習用に設定された架空の文化を調査する「南バルーンバ文化を探れ」や、トランプを用いた「バーンガ」等のシミュレーションゲームを取り入れたり、最後の講義では総括としてワールドカフェの形式でグループディスカッションを行ったりした。これにより、クラス内における学生同士のコミュニケーション促進に役立つ活動の割合が多くなるような構成とした。

講義のスケジュールとしては、まず表1にあるように、初回のオリエンテーションで、講義のねらい・形式やスケジュールを紹介した。続いて、講義の前半では異文化コミュニケーションの分野における基礎的な知識を扱った。講義の後半ではシミュレーションゲームやグループディスカッションを取り入れ、実際のコミュニケーション場面において、学んだ知識をどのように生かしていくかを実践的に学ぶという構成とした。

また、各講義の構成としては、はじめに2-4人程度でミニワークを行うことから始めた。その後、講義に加えて、ワークシートを記入したり、ディスカッションに参加したりし、講義終了までにリアクションペーパーを提出してもらった。リアクションペーパーには、まず学籍番号や氏名等の属性を書く部分が設けられている。それに続く自由記述欄として(1)講義の感想やコメントを記すもの、(2)○×形式のクイズ3問程度に続けて講義の感想やコメントを記すもの、(3)講義中のアクティビティで担当した役割を書いたうえで、気づいたり感じたりしたことを記すもの、の3種類がある。表2に、第6回と第8回の講義で配布されたタイプ(3)の自由記述欄の例を示す。

表2 リアクションペーパーの質問項目の例

(第6回「異文化シミュレーション(1)」および第8回「カルチャーショック(2)」)

第6回 【今日のアクティビティ(シミュレーション)を振り返って】

1. 今日は①「南バルーンバ人」と②「専門家」のどちらを担当しましたか?
2. ①「南バルーンバ人」を担当した方は、「南バルーンバ人」として「専門家」の質問に受け答えるなかで、感じたり気づいたりしたことを書いてください。
- ②「専門家」を担当した方は、「南バルーンバ人」の文化のルールはどのようなものだと推測しましたか?質問の時に工夫したことはありますか?うまく言い当てることができましたか?調査をしながら感じたり気づいたりしたことを書いてください。

第8回 【今日の異文化トレーニングを振り返って】

1. 今日の役割はどれでしたか?
→ 特命大使・特命大使補佐・ずっと最初のグループにいた
2. 特命大使や特命大使補佐だった方:自分とはルールの異なるグループを視察したときに、どのような心理状態でしたか?また、自分とは異なるルールを当てることができましたか?
ずっと最初のグループにいた方:自分のグループの人が出て行ったり、代わりにほかのグループの人が見に来たりした時どのような気持ちでしたか?
3. そのほか、活動を通じて感じたり気づいたりしたことを書いてください。

4.2. 「世界の文化」のリアクションペーパーに記された学生の反応

表3に、リアクションペーパーに記された学生のコメントの中から、特に注目すべきものに焦点を当てて記す。コメントの誤字・脱字と思われる部分は適宜修正した。記載内容に基づき、情緒に関する講義の影響は斜字で、行動については下線で、認知については二重下線をつけた。固有名詞にあたる部分はプライバシー保護の観点から伏字(〇〇)とした。また、コメントの後ろにカッコつきで記入者の性別とS1からS43までのIDを記入したが、このIDは学籍番号とは無関係に付したものであり、同一のIDは同一学生であることを示す。なお、学生の反応を幅広く見ることができるよう、できるだけ異なる学生のコメントから選んだ。

表3 リアクションペーパーに記されたコメントの例

<第1回>

- ・様々な方と話せて楽しかったです。1つのものをいろいろな視点で見られるようになっていけばいいなと思いました。(女子、S1)
- ・(前略) 自分のものの見方に自信と責任をもちつつ他者のものの見方を意識することができるような人間を目指したいです！(男子、S2)
- ・授業の内容が予想と違った。グループでの話し合いやクイズがあり、これからの授業が楽しみだ。(女子、S3)

<第2回>

- ・日本文化について4人班で思い浮かぶものを次々と挙げていきました。4人いると同じことを考えていたり、思いもしないことを挙げる人がいてとても面白かったです。沢山挙がって、特に一つ挙がるとそこに連なり、次々と挙がりました。見えないもの(筆者注:見えない文化)をグループ化するのは難しかったです。他班の発表を聞いて、元号や敬語はなるほどと思いました。文化を氷山にたとえるとという見えない部分は気づきにくいだけで、見える部分は氷山の一角にすぎないというのもとても興味深かったです。実際、自分の班でも圧倒的に見えるものが多く挙げられました。見えていない部分が重要であったり、基礎となっているというのも納得がいき、勉強になりました。特に価値観やアイコンタクトがそうであると思いました。(女子、S4)
- ・日本文化を挙げるときに、中国などの文化なのか日本の文化なのか分からないものやあやふやなものが意外と多くて、日本人でもちゃんとは日本のことを分かっていないんだなと思いました。また、班の中でアイディアを出す際も、他の班の発表でも新しい発見が多かったです。(女子、S5)
- ・目に見えない日本文化を挙げるのは難しかった。祝日を挙げている班が多い中で、日本人の心構えや国民気質を挙げている班があり、なるほど思った。こういう概念的なものが根底にあってこそ目に見える文化が形成されていくのだと思った。同じものをよいと思って人々が文化を作り上げていったのだろう。それが「共有」、「常識」である。あまり深く考えたことはなかったので、授業でこの内容を扱ってもらえて良かった。(女子、S6)

<第3回>

- ・ なぜハイコンテキストとローコンテキストという違いが生まれたのか、とても疑問に思ったので自分で調べてみたいと思います。(女子、S7)
- ・ 文化の違いだということが分からずに、相手の行動を否定的にとらえてしまう可能性があることが分かったので、自分のものさしだけで物事を判断することは危険だと思いました。(女子、S8)

<第4回>

- ・ (コミュニケーションにおいては)そもそも(中略)相手(人)に興味を持つこと、人の話を聞きたい、人に話をしたいという自分の気持ちを持つことが大前提として大事だと思いました。(女子、S9)
- ・ 外国人は物事を強くはっきり言うなあ、と思っていましたが、国の人種や多民族さも理由であることにとっても納得できました。(男子、S10)

<第5回>

- ・ 自分が思っていた以上に非言語コミュニケーションの果たす役割が大きくてびっくりしました。日常生活の中で少し意識してみたいと思います。意識するだけでも、相手に与える印象なども変わるかなと思いました。(女子、S11)
- ・ 今日授業を受けて、いつも何となく当たり前にとっていた行動(目があつたら目をそらすなど)について、客観的にとらえることができ、新しい気づきのできた時間になりました。(男子、S12)

<第6回>

- ・ (前略) 質問するというとどうしても内容に目が行ってしまうので、他の部分に注目するというのはとても勉強になりました。(女子、S7)
- ・ 質問の中身ではなく、質問それ自体に意味があるという構造が、ある種の物事の本質を見ているようだった(後略)(男子、S13)
- ・ (前略) 様々な人と触れ合うことで、一貫性を見つけ出すということが、文化の発見にもつながるのではないかと感じた。とてもおもしろいアクティビティでした！(女子、S14)
- ・ おじぎや表情といった非言語コミュニケーションは皆文化のシステムとして意識していなくて、盲点となっている気がした(女子、S15)
- ・ 答えを聞いて、言われてみればというものもあり、「言葉」がすべてじゃない

んだということを痛感しました。楽しかったです。(男子、S16)

・自分の文化が根付いているため、相手の文化を探るのは難しかったです (後略)

(男子、S17)

<第7回>

・異文化適応力チェックでは得点が高く、適応力があると判定された。思い返すと、中学生の時に〇〇(国名)でホームステイをしたときに、移民国家ならではの個性を認めあう文化をとてもうらやましいと感じた記憶があり、その経験が生きているのかなあと思いました。(男子、S10)

・手や腕を組みかえたり、腕時計を逆につけるだけで、とても違和感があった。これはカルチャーショック経験と同じことであり、普段の常識を覆し新しいものの見方や感覚を身につけることにもなると感じた。(女子、S18)

・(前略) 友達のカルチャーショックの話聞くのは楽しかった。海外のスーパーの店員さんが常に椅子に座っているという話だった。(女子、S19)

・自分自身では異文化適応度はそこそこ高いと思っていたが、柔軟性や感情制御の値が小さく出た。自分が気づかない場面で適応度が低いのはあまりよくないのかなと思った (男子、S13)

<第8回>

・何の説明もなく異文化同士が交流すると、とまどいが生まれることが分かった。違う文化と交流するときは、事前に相手のことを下調べしておくのも1つの礼儀かなと思った。(女子、S20)

・たかがトランプゲームでも、自分だけルールを知らず馴染めないとこんなに戸惑うものなのかと思いました。(女子、S21)

・異文化に入ることも不安だが、異文化の人々に入られる側も不安になることが分かった。(女子、S22)

・異文化の環境で、自分と違う文化に合わせながら何かをするのは難しいと思った。海外から日本に来た人にしっかり説明することが大事であると気づいた。(女子、S23)

・強力な外来種に侵食される在来種の気持ち分かった。(男子、S24)

・異文化から来る人が多いとルール自体を自分たちのものに変えてしまいかねない状況で、これは移住者の多い国に似たことが起きていそうだと思った。(男

子、S25)

・異なるルールでも、自分のルールに似通ったものとみなしてしまう傾向があるかもしれないと感じた。(男子、S26)

<第9回>

・(同じものを見ても) 描く絵も人それぞれ違うことから、自分が思っている絵と他人が思っている絵もちがうので、相手を想像して(伝えて)いきたいと思いました。(女子、S27)

・今日の体験は、患者さんにレントゲンとかを説明する際に生かせそう。(女子、S28)

・即時に相手に身体の悪い部分を絵で伝えるようなことが医師になったあとであれば、そのときに伝わりやすくなるし、患者に言われたことを再現するときにも役立ちそうだと思った。(男子、S25)

・人に何か(見た絵について言葉だけで)伝えるとき、相手は絵を見ていないので、相手の立場になって考える力が必要だと思った。(男子、S29)

・(前略) 情報が多い時、一番伝えたいことを優先的に伝えていこうと思います。全体を意識しつつ工夫をすることが大切だと思いました。(女子、S4)

<第10回>

・アイデンティティというのは属する集団によって変わってくるものだと思った。(男子、S30)

・よく知らない人のことをあまり話さずにその人となりを思い込むのは危ないと思った。(女子、S31)

・知っているようで、他の人のことを知らなかった。まだまだ観察力が足りない。(女子、S32)

<第11回>

・限られた時間で、皆と協力するのが楽しかった。(男子、S33)

・先を見据えて、計画的に作業することも大事だと思いました。(女子、S34 ; S5も同様)

<第12回>

・ワークシートで友達の意見も聞けて、自分と同じだったり、違うところがあったり興味深かったです。色々な発想・感想を知ることができました。(女子、S4)

<第13回>

- ・(前略) 話し合うといろいろな思考ができて良かったです。(女子、S35)
- ・細かいところで価値観の違いを感じた。(男子、S36)
- ・チームで知恵を合わせることの大切さを学んだ。また、メンバーの異なる意見から1つの方針を決定する過程は難しかった。(女子、S37)
- ・自分とは異なる意見が出てきて、なるほどなと感心することがあったので、「三人寄れば文殊の知恵」を感じた。(男子、S38)
- ・人によって何を大切だと感じるのかが違い興味深かった。(女子、S39)

<第14回>

- ・チームの中で様々なキャラクターがいること、気づいたこと(工夫や秘訣)をすぐに共有すること(試行錯誤)、各自の強みを生かすために仕事を分担すること、皆で集まって徹底的に話す時間を大事に使うこと、これらが大切だと思った。(女子、S37)
- ・それぞれの(メンバーの)意見をよく聞いて、統合することが大切だと思った。(女子、S40)

<第15回>

- ・留学してる友人がすごく多くて、その留学先の友達の友達と会うこともたまにあるので、そういう人たちと仲良くなりたいと思っている。(中略) この授業でやったことを(思い)浮かべながらコミュニケーションしようと思う。(男子、S41)
- ・文化の授業を通じて、普段から何気なくやっていることの難しさや奥深さを知ることができたことを、自班と他班の交流で気づかされた。似たような環境で育っている人同士でも異なる意見が出るのが面白かった。(男子、S42)
- ・文化の授業で一番印象に残ったことは、仲の良さにかかわらず、人に何かを正確に伝えることは難しいことです。(中略) また、自分が考えている感情を伝えても相手に正確に伝わっているとは限らないことを学びました。これらは将来チーム医療や患者さんとのコミュニケーションに役立つと感じています。(女子、S43)

4.3. 学生の反応から分かる授業の効果

表3のコメントから、「世界の文化」の講義を通じて、学生たちが他の学生の話聞き多様な意見やものの見方に触れて「楽しかった」「面白かった」、価値観の違いを知って「興味深かった」と感じていたことが分かる。また、講義から得た知識や経験をもとに、文化の違いがどうして生まれたのか「自分で調べてみたい」と述べたり、留学中の友人の友人たちと「仲良くなりしたい」と語ったりする等、具体的なアクションにつなげていきたいと意欲的になっている。その他、「日常生活の中で（非言語コミュニケーションの果たす役割を）少し意識してみたい」、「違う文化（の人）と交流するときは、事前に相手のことを下調べしておく」、「海外から日本に来た人にしっかり説明することが大事」、「相手を想像して（伝えて）いきたい」という、コミュニケーションを円滑に進めていくうえで有用な心構えも持つようになっている。さらに、自分の過去の経験に類似のケースがあるかを振り返ったり、現在の生活や将来のキャリアで生かせそうなことに思いをはせたり、というように過去・現在・未来の幅広い時間軸に渡る気づきを得ている。とりわけ未来に関しては、「患者さんにレントゲンとかを説明する際に生かせそう」、「身体の悪い部分を絵で伝えるようなことが医師になったあとあれば、そのときに伝わりやすくなるし、患者に言われたことを再現するときにも役立つそう」、「将来チーム医療や患者さんとのコミュニケーションに役立つ」などの具体的な医療場面を想定しているところが特徴的である。加えて、「普段から何気なくやっていることの難しさや奥深さを（中略）、自班と他班の交流で気づかされた。似たような環境で育っている人同士でも異なる意見が出るのが面白かった」とS42が記したように、気づきと面白さの2種類の要素が相互に影響を及ぼしあっている。ゆえに「世界の文化」の講義においては、認知・情緒・行動の3つの側面に渡る影響があったことが示唆される。すなわち、認知面では「過去・現在・未来につながる気づき」、情緒面では「楽しさ・面白さ」、行動面では「行動化の促進」にそれぞれ影響が及んでいる。さらに、各要素もお互いにつながりがあったことから、これを講義における影響を示す三要素モデルとして表現したものが図1である。ア

クティブラーニングに期待される学習効果としては、知識習得の他、学習意欲の喚起や、幅広い能力の育成が指摘されている³¹。総じて、学生のコメントから本講義ではこのような多面的な効果が得られ、講義後のさらなる主体的かつ継続的な学びにつながりえたことが示唆される。特に本講義のテーマであるコミュニケーションにおいて中核となるのは、唯一の正解を見つけることが困難であるということである。その一方で、生きたり働いたりする上では他の人とのコミュニケーションを常に繰り返し行っていかなければならない。そのため、本講義で得た文化やコミュニケーションに関する知識を、その後の人生全般にわたって試行錯誤しながら活用し、他者と協力しながらより豊かな人生を歩んでいこうとする姿勢や態度が求められる。学生のコメントにはその萌芽が見られたことから、2年次以降もさらなる向上を目指して学びを発展させていってもらいたい。

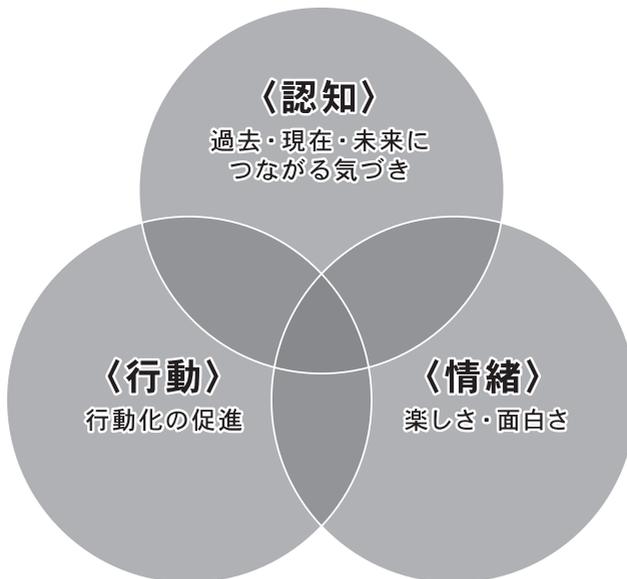


図1「世界の文化」の影響を示す三要素モデル³²

5. まとめと今後に向けて

日本語や英語という日頃慣れ親しんでいる言語以外の、世界中の多様な言語の成り立ちや実情を学ぶことで、英語一辺倒の狭量な視点から解放されることは大学の教養科目として意義深く、医学部の言語教育の風景の中に配置した場合は、きわめて精彩を放つ。またアングロサクソンの言語・文化の表象以外にも多様な表象の形態が存在する、という認識を持つことは、英語を主言語として教授する本学の外国語教育に健全なバランスを加える働きをする。このような理念のもとに今回新機軸として打ち出された「世界の言語と文化」という授業内容は、本論において概略した歴史的脈絡、つまり、ある特定の言語が教授されてきた過程の延長線上に置いてみると、本学医学部における今後の外国語教育の一側面を示唆しているように思われる。

カリキュラムの構築にあたって計画案では高い理念を掲げながらも実態や実績が不明である事例が全国的に見受けられるが、教育報告という形をとる本論においては、本学の「世界の言語」「世界の文化」の各担当者により、計画、実施、結果のフィードバックまでの一連の過程が明らかにされ、今後の大きな展開の可能性を秘めつつ進行していることがわかった。今後この2つの授業内容が医学部における外国語教育において、あるいは広く医学教育においてどれほど重要な意義を持っているかを、深く討究していく価値がある。あるときには英語・ドイツ語とならんでフランス語を教えたり、スペイン語とラテン語を選択科目で同時に提供する、といったプログラムが過去に存在したことは事実として参考になったが、日進月歩進んでいく医学知識の習得に忙しい医学生にとって、どのような外国語教育が望ましいのか、という課題について過去の時々下された結論あるいは合意を示す資料は入手できなかった。何を教育すべきかを合理的に説明する根拠を普段の教育実践の中で絶えず確認していくことが外国語教室には求められる。またその確認を、教育組織全体（基礎科学・基礎医学・臨床医学の教授陣全体）が共有することが重要である。

- [1] 安田健次郎、『慶應医学』84(2)、2007、pp.69-84
- [2] 「済生学舎規則」(明治10年)第1条
- [3] 『改正官立公立及び私立諸学校規則集』(広原新編)、1895、p.92-3
- [4] 野口英世の自筆の履歴書による。唐沢信安、『済生学舎と長谷川泰一野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校』日本医事新報社1996、p.73
- [5] 『東京遊學案内 中篇』、少年園、1898、p.159
- [6] 『日本医学』創刊号、1904年10月(日本医科大学校史編纂委員会、『日本医科大学の歴史』、学校法人日本医科大学、2001、p.119、p.132
- [7] 「日本医学専門学校学則」『日本医学専門学校一覽』(大正14年10月編)、1925、国立公文書館蔵
- [8] 「日本医科大学設立要項」、行政文書「財団法人日本医科大学ニ於テ大学令ニ依リ日本医科大学ヲ設立ス」、1926、国立公文書館蔵
- [9] 「日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1930、国立公文書館蔵、東專第28号
- [10] 日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1933、国立公文書館蔵、東專第516号
- [11] 行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1935、国立公文書館蔵、東專第489号
- [12] 「日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則中変更認可」、1946、国立公文書館蔵、校学第185号
- [13] 「日本医科大学規程集録第一部分冊」
- [14] 「日本医科大学学則」(昭和42年4月1日改訂)、日本医科大学同窓会、『便覧日本医科大学1968』、学校法人日本医科大学、1968、p.139
- [15] 日本医科大学70周年記念実行委員会、『日本医科大学70周年記念誌』、1973、p.678-679
- [16] 日本医科大学『学生便覧1999』(以下『学生便覧』と略)
- [17] 学校法人日本医科大学創立130周年記念誌出版実行委員会『学校法人日本医科大学創立百三十周年記念誌』、2006、p.111
- [18] 「日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1928、1933、国立公文書館、東專第313号、東專第723号
- [19] 「日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1933、国立公文書館、東專第516号
- [20] 前掲(17)、p.111
- [21] 「日本医科大学学則」、行政文書「日本医科大学学則変更認可」、1941、東專第94号
- [22] 前掲(12)
- [23] 以下、教務関係の情報は本学の各年『学生便覧』による。
- [24] 前掲(1)
- [25] デイヴィッド・グラッドル、『英語の未来』、山岸勝栄(訳)、研究社出版、1999、p.27

(38)

- [26] 前掲(24)、p.28
- [27] 三浦英俊 他(2017)「大学における第二外国語教育の意義とこれからの展開」『大学時報』2017.5 p.14-29
- [28] 大橋洸太郎、高嶋幸太(2018)「学生が望む大学におけるよい第二外国語教育」『教育心理学研究』66、p.95-106
- [29] 本学の英語教育については以下で公開されている。
<http://www2.nms.ac.jp/english-department/ENMS/newcurriculumpolicy.html>
- [30] カーク・スティーブン、西川純恵(2018)「脱・講義型授業へー学習成果向上のための授業デザイン」『日本医科大学基礎科学紀要』第47号、p.31-47では、本学での英語教育におけるアクティブラーニングの取り組みが紹介されている。
- [31] 中井俊樹(2015)『アクティブラーニング』玉川大学出版部、pp.9-10
- [32] 高濱愛・田中共子(2012)「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動ーリエントリー課題への対応とキャリア形成の支援を焦点にー」『異文化間教育』第35号、pp.93-103

(受付日 令和2年9月30日)

(受理日 令和2年12月25日)